

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1126 号	氏 名	尾 澤 一 樹
論文審査担当者	主 査 田中 榮司 副 査 加藤 博之 ・ 川眞田 樹人		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>子宮頸がんワクチンに関しては、2006年に4価のガーダシルと2価のサーバリックスが海外で発売された。2010年に子宮頸がん等ワクチン接種緊急促進事業として本邦に導入され、2013年4月より小学6年生から高校1年生を対象に定期接種が開始となった。その後、本ワクチン接種後に歩行障害、手足の難治性疼痛や震えなどの症状を訴える女児が出現し、問題となった。2013年6月から厚生労働省は子宮頸がんワクチンの勧奨を中止した。本研究ではHPVワクチン接種後の臨床症状のスペクトラムを明らかにし、HPVワクチン接種と接種後の特異な症状の出現との時間的な経緯を明らかにすることを目的とした。</p> <p>対象は、2013年6月から2016年12月に当院を受診した163名。前提条件3項目、主要症状10項目、他覚所見6項目、除外3項目からなる新たな診断基準を作成した。前提条件を満たし、除外項目に当てはまらないもののうち、主要症状5項目以上かつ他覚所見3項目以上を満たす患者を definite、主要症状5項目以上のみを満たす患者を probable と定義し、この診断基準を満たした例を検討した。</p> <p>その結果、尾澤は次の結果を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">163名のうち43名が除外項目に当てはまった。残りの120名のうち、48名が診断基準を満たさず、30名が definite、42名が probable と診断した。診断された72名では初回接種が11歳-19歳に及び平均13.6±1.6歳、症状が発現した年齢は12-20歳で平均14.8±1.7歳であった。初回接種から症状発現までの期間は1-1532日(平均319.7±349.3日)であった。症状発現の時期は2010年10月から2015年10月で、その後14ヶ月以上にわたり症状を有する新たな患者は発生していない。HPVワクチン初回接種の時間的分布とワクチン接種後症状発現の時間的分布は、約8ヶ月のずれを持って類似のパターンを呈しており、初回接種のピークは2011年7月から2012年9月で、症状発現のピークは2011年9月から2013年8月であった。 <p>これらの結果から、HPVワクチン接種が同ワクチン接種後の患者において特有の症状を一時的に高頻度で出現させていることと関連していることが示唆される。HPVワクチン接種後の多様な症状を検討した報告は海外からも複数出されているが、本研究は、163名と多くの症例を検討したものであり、症状や発症時期の傾向を示し、診断基準の作成を試みたものである。</p> <p>以上の結果より、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			